

京極読書新聞 <第110号>

発行日: 令和3年12月23日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

令和2年度 読書感想文コンクールより

令和2年度京極町読書感想文コンクールで入選した中学生の作品を紹介します。京極の中学生はどんな本を読んでいるのか、またその本のどんなところに注目したのか…。感想文の作品集と本は湧学館で読むことができます。どうぞ手に取ってみてくださいね。



強い花になりたい(書名:その景色をさがして) 3年 太島 彩綺さん

『もしトーコと同じ状況で私もいたら、眩しくてキラキラしていたはずの世界が輝きを失ったように感じてつまらなくなるだろう。』いくつもの辛い経験を乗り越える主人公のトーコ。太島さんはそんなトーコの姿がかっこよく、憧れの存在になったと書いています。病気で亡くなってしまったお母さんがトーコに見せたかった景色。その人の心を動かす自然の力強さと美しさ、そしてトーコを応援する気持ちが込められた感想文でした。

「その景色をさがして」 中山聖子/著 (PHP研究所, 2018)



愛を知りたい(書名:愛を知らない) 3年 及川 姫奈さん

『私が今まで感じたことのない、新しい「愛」を知ることができた』及川さんがこの本を読んでよかったと感じたことの一つです。登場する親子の姿から過去の自分を振り返ること、主人公の失敗から学ぶこと。及川さんが周りの人々を大切にしている気持ちが伝わってくる感想文でした。表紙やタイトルから直感的に読む本を決める、そのセンスがうらやましいです！

「愛を知らない」 一木けい/著 (ポプラ社, 2019)



蜘蛛の糸を読んで 3年 並木 省吾さん

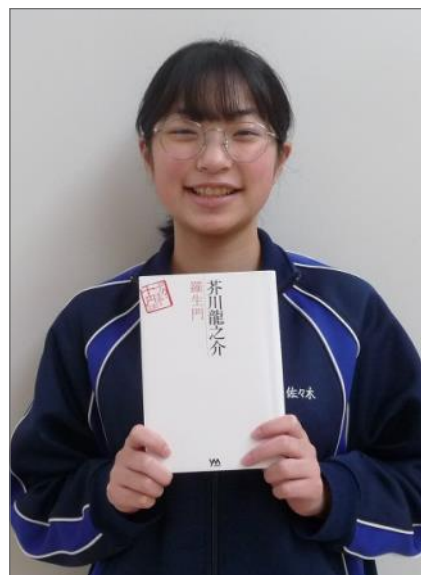
『助かりたいと思ったら、糸にたくさん群がっている人を見た時切れてしまうと思うだろうし、何とかして助かりたいと僕も思います』悪人の犍陀多(カンダタ)は反省する気持ちがない、でも並木さんは犍陀多の気持ちも少しわかると素直に書いていました。本を読むきっかけでもあった「朝の蜘蛛は殺さないで逃がすのはどうしてか」、みなさんも本を読んで考えてみてはいかがでしょうか？

「蜘蛛の糸」 芥川龍之介/著 (1918)

「羅生門」を読んで 3年 佐々木 玲未香さん

『この終わり方じゃない、違う終わり方をすれば著者の伝えたいことも変わってくるんじゃないかなと思います』佐々木さんは短編であるこの小説を読み込み、曖昧さについて注目しています。著者が伝えたかった、その“人間の曖昧さ・心の変わりやすさ”を否定せず、人間らしさの一つとして大事にしていかなければいけない考え方だと感想文をまとめてくれました。

「羅生門」 芥川龍之介/著 (1915)



君は月夜に光り輝く 3年 森 悠斗さん

『つらいときこそ明るくふるまうこと』『つらいときにはちゃんと本音で話すこと』この二つは、森さんがこの本を読んで、考え方が変わったと表現していることです。物語の人物やその言葉に触れることで、自分だったらどう思うかを考えて感想文にしてくれました。映画やマンガをきっかけに原作の本を読んでみるというのも、それぞれの良いところが楽しめますよね。

「君は月夜に光り輝く」 佐野徹也/著 (KADOKAWA, 2017)



「山吹」をめぐる(2)

《『平家物語』を読む会》 村山 功一

伝説・伝承に見る「山吹」の足跡

前回はやや面倒な内容になってしまいましたが、『平家』の中で山吹はどの様に描かれているのかを、諸本間の異同や巴との比較をしつつ山吹の姿を思い浮かべようとしてみました。しかし残念ながら山吹はまったく姿を現しません。しかも私達にはなじみの深い巴さえも、実在したかどうかは分からないのです。二人の“美女(便女)”が実在したか否かを追究し証明するのは、学者・専門家の先生方の今後の研究成果を待つばかりです。

それはそれとして、『平家』の中で二人は確かに存在しています。史実として実在したかどうかに関係なく、物語の登場人物として“実在”しているのです。さらに、この二人は豊富な伝説・伝承に彩られています。義仲最後の合戦で大活躍をする巴はもちろん、病気のためこの合戦に参加できず都に留まった山吹もまた、全国各地に伝説・伝承の足跡を残しているのです。例えば、義仲が育った長野県日義(ひよし)村には巴が幼い頃水浴びをしたと伝えられる“巴ヶ淵”があり、その向かいには山吹が住んでいたとされる“山吹山”があります。

歴史に「もし～」は禁物です。しかし、歴史を扱った物語であれば、「もし」は許されます。むしろ、「もし」を積み重ねることにより、物語はいつそう楽しくなるでしょう。そこで、想像力を逞しく、「もし」を駆使して山吹を考えてみることにします。

京都の三条京阪駅の裏手、現在は京都市教育委員会が置かれている一角に山吹の墓と伝えられる宝篋印塔(ほうきょういんとう)が建っています。「～山吹は労(いたわり)あつて都にとゞまりぬ(山吹は病を得て都に留まった)」と書かれています。その留まった場所がここなののでしょうか。そしてこの地で療養生活を送っていたのでしょうか。お墓が建っているということは、ここで亡くなったのかも知れません。問題はこの場所です。

朝日將軍木曾義仲が平家を追い出し颯爽と都入りした時、山吹も巴と一緒に都の土を踏みます。そのわずか一年後、後白河院と対立し従兄弟である源頼朝に攻められ、義仲は完全に“朝敵”の立場になってしまいました。六条河原で義経勢と激闘を展開しますが、力及ばず敗北。再起を図るべく、三条大路の東、粟田口(あわたぐち)を目指します。敗走とはいいいながら、平家を追い落とした英雄義仲を『平家』は次のように描きます。*2

き そ さ まのかみ しやうぞく にしき ひたれ からあやをとし よろい くわがた
 木曾左馬頭、其日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、鍬形う(ツ)
 かふと を おほだち
 たる 甲の緒しめ、いかものづくりの大太刀はき、石うちの矢の、其日のいくさに射
 かしらだか しげどう おに あしげ
 て少々のか(ツ)たるを、頭高に負ひなし、滋藤の弓も(ツ)て、きこゆる木曾の鬼草毛
 き(ん)ぶくりん くら
 といふ馬の、きはめてふとうたくましいに、黄覆輪の鞍おいてぞ乗(ツ)たりける>

実に堂々とした大將軍のいでたちで、着用する装束、甲冑はどれも最高級です。それは、華やかなばかりではありません。この装束にはこの合戦が自分にとって最後の合戦になるだろうという、義仲の悲壮な決意が込められているのです。その後の合戦場面での巴の装束は、伝本により異なっています。ある本には「紫皮の直垂に萌黄(もえぎ)の腹巻」とあり、ある本には「練貫(ねりぬき)に、梅のたち枝縫(えぬひ)たる直垂に、萌黄句(にほひ)の鎧」とあります。萌黄は薄緑色、腹巻は軽量簡略な鎧。練貫は光沢のある絹織物、句は下に行くほど色が薄くなる配色で、こちらは大将クラスが着用する本格的な大鎧を示しています。いずれにせよ、色鮮やかで女性らしい装束ながら、「女武者」としての風格も感じられます。このような装束を身にまとい、一行は三条大路を東へ駆け抜けて行ったものと思われます。

さて、義仲はなぜ栗田口に向かったのでしょうか。京都には〔京都七口〕といわれる都と地方を結ぶ出入口(右図参照*3)があります。彼が再起を図るのであれば、本拠地である木曾谷を目指し、北に通じる道を取るべきでしょう。義経もそのように予想します。しかし義仲はあえて栗田口を目指したのです。『平家』はその理由を、範頼勢と戦う今井兼平と合流しようとしたから、と述べています。今井は義仲にとって幼い日から一緒に育った乳母子(めのとこ)*4であり、死ぬときは一緒に誓い合った最も信頼する腹臣でもあります。ただ、私にはそれだけでは無いように思われるのです。義仲はこの三条大路のどこかで療養生活を送る山吹に、秘かに別れを告げようとしたのではないか。もちろん『平家』には何も書かれてはいませんが、そう考えるとこれまで存在感さえ無かった山吹が、はっきりと登場人物の一人として浮かび上がってくるように感じられるのです。



もちろんこれは「もし」に過ぎません。しかし、『平家』が描く義仲の言動をみる時、山吹に対するこうした思いも十分うなずけるのです。義仲は今井との合流に成功しますが、死を覚悟した義仲は、共に死ぬ気で奮戦する巴に向かって次のように命じます。「おのれは、とうとう、女なれば、いづちへもゆけ(お前は女であるから、ただちにどこへでも逃れて行け)」と。一見、突き放すような言葉ですが、そこには巴を自分と道連れにしたい、つまり死なせたくないという義仲の優しさが、込められているものと思います。こうした義仲であれば、巴同様、忠節を尽くしてくれた山吹に対しても、感謝を込めて別れを告げることもあり得るのではないかと……。 「もし」そうであるならば、史実としての実在とは関係なく、物語世界において山吹は現在石碑の建つあの場所に、確かに住んでいたのです。「もし」を重ねて『平家』を読むと、新しい風景が見えてきたり、今まで姿の見えなかった人物に出会ったりして楽しみが増すと同時に、より豊穡な物語世界を読者に示してくれるように思います。

【注】*1. 宝篋印塔…供養塔の形式の一つ。 *2. <杉本圭三郎訳『全訳注平家物語(九)』講談社学術文庫>による。 *3. <水原一『平家物語の世界(下)』日本放送出版協会>より転載。 *4. 乳母の子。乳兄弟。今井兼平の場合、諸本により異なる。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>



京極読書新聞のバックナンバーは、湧学館での配布・湧学館ホームページからご覧ください